

女性雑誌『ナチ女性展望』 *NS Frauen Warte* がつくり出す母親像

桑原ヒサ子

- (12) 渡邊洋子 前掲書3に同
(13) 渡邊洋子 前掲書3に同
(14) ここで扱う『採訪』という史料は、『大日本青少年団史編纂資料』として日本青年館が(秘)の印を付けて、昭和43年から『大日本青少年団史』作成のために、関係者から聞き取りをしたものである。これは公刊されたものではないが、日本青年館資料室に保管されており、雑誌『青年(女子版)』資料収集に際して、日本青年館から閲覧させていただいた。ここでは女子青年に関する内容及びその関連資料を扱ってゆく。

扱った資料は以下の通りである。

昭和43年8月1日「採訪第6」(秘) 処女会・女子青年団及びその機関誌について
(大日本青少年団史編集委員会より)

国立教育会館社会教育協会職員 村田信及び野地吉之助両氏よりの聞き書き調査者 小沢滋
青少年団に統合したときに文部省で発行した女子青年団に関する小沢氏の未定稿「大日本青少年団史」第2章第2節の2項よりの要約。

昭和43年9月「採訪第10」(秘)

女子青年団についての海江田喜次郎氏の手紙(大日本青少年団史編集委員会より)
調査者 小沢滋

野地氏が海江田氏に問い合わせをした返事

編者注：昭和2年4月 大日本聯合女子青年団創立宣言

昭和2年10月 大日本聯合女子青年団発団式並びに第1回大会(於日本青館)

昭和43年9月「採訪第11」(秘) 関屋龍吉氏に女子青年団、青年訓練・青年団等について聞く
(大日本青少年団史編集委員会より)

芝公園日本女子会館 出席者 関屋龍吉氏及び野尻丈七氏、女子会館総務部長清水氏、事業部長吉田氏

調査者 龍谷辰治郎、小沢滋、成田久四郎

関屋氏は連合青年団、連合女子青年団、婦人会、青年訓練所等の創設等につき、文部省の普通学務局長として指導力を発揮し、大日本聯合(男・女)青年団の誕生に際し理事に就任するなど、足跡を残している。

編集部：青年団の統合問題は15年9月に発表された。社会教育協会と連合女子青年団が「処女の友」と「女子青年」の統一を図ったのはその後のこと。「女子青年」は青少年団の結成によって、日本青年館に有償移譲され、16年10月から「青年」(女子版)となった。*以上の話は「大日本連合女子青年団の全貌」昭和17年5月刊 河合佐治編集・発行により補った。

- (15) 渡邊洋子 前掲書3に同
(16) 日本青年館編 前掲書2に同 211-375頁
(17) 日本青年館編 前掲書2に同 437-446頁
(18) 雑誌『処女の友』創刊号は日本青年館蔵を用いた
(19) 渡邊洋子 前掲書3に同
(20) 今田絵里香『少女の社会史』勁草書房 2007 1-187頁
(21) 今田絵里香 前掲書20に同 225-231頁
(22) 今田絵里香 前掲書20に同 1-187頁
(23) 雑誌『青年(女子版)』見本は日本青年館蔵を用いた
(24) 中嶋邦「大正期における「生活改善運動」」総合女性史研究会編『日本女性史論集6 女性の暮らしと労働』吉川弘文館 1998 230-263頁
(25) 今田絵里香 前掲書20に同 229-230頁

はじめに

ドイツ人女性はこれまで一度としてドイツ人男性だけを危険に晒すことはありませんでした— 私たちもまた私たちの義務を果たそうではありませんか。なぜなら、私たちが望んだわけではないこの闘いに勝利するかは、私たちの力にもかかっているからです。

これは、ドイツ軍のポーランド侵攻によって第二次世界大戦が勃発したことを受けて、官製女性雑誌『ナチ女性展望』の第8年度5号(1939年9月第1号)⁽¹⁾に折込の形で臨時に挿入された全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ=クリンクによる「ドイツ女性に告ぐ!」の一部である。この引用は、女性とは平和を好む性であるとの主張とは裏腹に、ナチ女性たちも政権の座にあった男性たちの攻撃的な基本姿勢を共有し、戦争に対して抵抗しようなどと一切考えていなかったことを物語っている。

それどころか、ショルツ=クリンクが統轄するナチ女性団とドイツ女性事業団⁽²⁾のそれ自体は無害にみえる諸活動、すなわち家政における儉約、母親援助、就労女性の子どもの世話、病人看護、近隣互助に関わる活動は、活動初期から有事を前提として準備されていた。したがって、いざ開戦となった時も「銃後」に不可欠な体制は支障なく機能したのだった。

女性組織もナチスの階層的組織(大管区、管区、支部、細胞、班)に従って構成されたが、この巨大ネットワークを通した円滑な活動には当然のことながら、非ナチ女性たちに国民社会主義の思想をたたき込み、民族共同体に取り込む必要があった。これは、1934年2月に全国女性指導者に就任したショルツ=クリンクに与えられた課題であった。ここで分析対象とする『ナチ女性展望』(初年度1号1932年7月1日~第13年度4号1944/45年)は女性大衆、中でも中産階級の女性たちを啓蒙する最重要メディアの一つであった。

『ナチ女性展望』を発行したのは、全国女性指導部の「報道とプロバガンダ部局」である。そこで働く女性たちは、女性カメラマンや映画製作者を雇い、日刊新聞の編集者たちとコンタクトを取りつつ、『ナチ女性展望』のほかにも何種類かの女性雑誌を刊行し、女性問題をテーマとする自主制作の映画の上映会や展覧会を開催した。すなわち『ナチ女性展望』は、女性の編集・発行による、女性による女性のための女性雑誌だったわけだが、と

りわけ当時の女性雑誌市場で第1位の発行部数(1939年時点で140万部、女性雑誌市場の半分以上をカバーした。第2位の『主婦の雑誌』は57万5千部である⁽³⁾)を誇るこの官製雑誌は、社会的・文化的領域において、読者対象だった中産階級の家庭や職場における公的女性像に多大な影響を及ぼした。

『ナチ女性展望』はどうか、女性たちを思想的に民族共同体に取り込んでいったのだろうか。この雑誌の表紙を対象にしてジェンダー分析を行ってみると、表紙の半数以上が母親を表象したものであった。⁽⁴⁾対象を本文中に掲載されている写真や絵まで広げても、母親表象が大半を占めることに変わりはない。このことは、ナチの女性イデオロギーに照らせば当然の結果といえる。1934年9月8日、ニュルンベルクで開催された女性会議でアドルフ・ヒトラーは、「女性解放という言葉はユダヤ人の知識人だけが考え出せる言葉だ」として、次のように演説した。⁽⁵⁾

男性の世界は国家であり、男性の世界は闘うことであり、共同体のために尽力することであると言えるなら、女性の世界はもっと小さな世界だと言えるかもしれない。なぜなら、女性の世界は夫であり、家族であり、子供たちであり、家だからである。(…)
神の摂理は女性に自らの世界に気配りするよう割り当てており、そうして初めて男性の世界は形成し築かれる。

さらに、「女性が産む子ども一人ひとりが、民族の存亡を賭けた女性による勝利の闘いなのである」と強調した。すなわち、女性は男性の補助役として居場所を家庭に定められたが、その「母性」や「母親」としての存在には敬意を表されることになったのである。

『ナチ女性展望』で表象される母親像は決して一様ではない。この女性雑誌を通して公に宣伝される母親像の大半は二つの元型に分類される。すなわち「聖母マリア」と「地母神」である。この互いに相容れない二つの女性像は、時には混在して登場することもあり、あるいは実際の母が元型を体現する場合もある。あるいは、元型が持つ意味を展開させて、読者の理解を容易にさせる手段として利用される時もある。本稿ではまず、プロパガンダとして使用された母親像を整理する。次に、ナチ女性団・ドイツ女性事業団の諸活動は、結果として、批判されたヴァイマル共和国時代の「新しい女性」像に代わる「新しい母親」像をつくり出したのではないかというテーゼを立てて、彼女たちが雑誌の中で伝える保守的母親像と彼女たちの実際の行動の乖離について考えてみたい。

1. 「聖母マリア」と「地母神」

(1) 聖母マリアが示す民族共同体における女性の使命

プロテスタントとカトリックの違いはあれ、ドイツはキリスト教国であるから、「母の中の母」である聖母は、最も受け入れやすい手本であった。

聖母像は、そのほとんどが1933年から36年の間に登場し、掲載写真は「妊婦のマリア」像が1枚ある以外は、ほぼ例外なく幼児キリストを抱く「聖母子」像である。ナチ時代の女性彫刻家マリア・ヒンケルダイ=ヴィトケによる「聖母子」像が1枚あるが、それ以外は中世に創作された美術的価値のある「聖母子」像やアルブレヒト・デューラーら著名な画家の絵画ばかりである。

「聖母マリア」には3つの含意がある。第一に、「聖処女」として、「聖母子」像は、生まれてくる子どもの父親の不在を意味する。このことは、子どもの誕生が、家族の幸せよりも民族共同体としての国家の繁栄につながることや総統への絶対的忠誠を意識させるのに都合がよかった。これに呼応するように、父親が一緒の家族写真は稀で、母子のみの、つまり「聖母子」像の構図に倣った写真が大半を占める。表紙の男性表象では、父親は全体の5%に満たないが、兵士は45%

に及ぶ。つまり民族共同体で期待される性別役割分担は、女性は産む性としての母親、男性は国家のために闘う兵士というわけである。

第二に、「悲しみの聖母」として、誕生の時から受難の道を運命づけられた息子との関係性が挙げられる。聖母の運命と重ねて、息子を産み、国民社会主義の思想を植え付け、国家に捧げる。つまり民族共同体への犠牲的精神を持つことが母の使命であると訴えかける。戦時期になると、この「悲しみの聖母」のモチーフは現実のものとなって再登場することになる。

第三は「聖母の戴冠」、すなわち最終的には母としての栄光を得るという含意である。女性の存在価値は、息子の英雄的好意によってのみ生まれるという理解がそこにはある。

図1は最初期の聖母子像で、アルブレヒト・デューラー



図1 「三日月に立つマドンナ」
三日月は「死と再生」を象徴する
第2年度2号(1933年7月)



図2 A.デューラー「聖母子」
第2年度22号(1934年5月)

による。図2もデューラーの聖母子像だが、キャプションには次のように母親の心得が説かれている。

女性存在の王冠は母であること。元気な子を産み、ドイツ的思考と行動を教える。血と精神の絆を解くことなく、子どもたちは民族と祖国につながる。英雄的死へと導くことが、ドイツに永遠の価値を贈ることになる。

初期段階では、民族共同体を支える女性の使命について啓蒙するために、「聖母子」像を使った理想的母親像に偏っていたことが分かる。同じ時期の図3でも、母性を表現しようとして、女性が乳房と子宮の位置に手を添える、理想的表現傾向が現れている。

(2)聖母マリアから地母神へ

第2年度22号(1934年5月第1号)と第3年度5号(1934年8月第2号)のナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動報告は、冬期援助事業を通して、国民の悲惨な状況、すなわち住環境の劣悪さや経済的困窮、そして生きることへの失望を目の当たりにしたことを伝えている。たしかに、母親となることが女性にとっての公的信条ではあったが、先の世界大戦の敗戦、賠償問題それにインフレと空前の失業による社会的・経済的不安のために、現実問題として数多くの子どもを産む環境にはなかったのである。しかし、1935年から36年にかけて失業問題が改善され、経済的安定期に入ると、子だくさんではない「聖母マリア」と入れ替わるように「地母神」のイメージが登場してくる。

(3)地母神としての農婦の母

①多産と豊穰、二つのイメージ

「地母神」は「母なる大地」の人格化であるから、一貫して農婦の母の姿で表象される。

そこには、人口政策として女性を産む性に特化する方針と、国民を養う食糧政策として農業を国家の基盤とする方針が重ねられている。図4は「地母神」を元



図3 「母性」
初年度22号(1933年5月)



図4 「ドイツの収穫」
初年度22号(1933年5月)

型とする最初のものである。本来「地母神」はたくましい母として表象されるが、ここでは理想化されて農婦としては華奢な体つきの母親像である。キャプションは「ドイツの収穫」。子どもと作物という国家の二重の「収穫」という意味が見て取れる。



図5 「母」
第7年度3号(1938年8月)

図6 エーリッヒ・エーリア作
「あなたの胎内から
国民の新たな力が湧き出す」
第10年度7号(1941年10月)

図5のカール・ディップ
ティッシュの絵画「母」に

は、「実りの時を迎えた穀物畑に囲まれ、豊穰のシンボルとなっている」と解説が付けられている。戦時期になると、「地母神」の表現からも切羽詰まった雰囲気伝わってくる。図6には、ゲルマニアを連想させる男性のようにたくましい農婦が描かれている。実相を映しているのか、左手後方には外国人労働者と思える人物も見える。

②「ドイツ母親名誉十字章」



『ナチ女性展望』はナチの女性イデオロギーに従って、まず「聖母」像を使って民族共同体における女性の使命を説いた。そして1935年から36年にかけて経済が立て直される頃から「地母神」のイメージを駆使して「子だくさん」を訴え始めたが、このプロパガンダは、1936年9月の党大会でヒトラーがドイツの自給自足体制を目指す「四カ年計画」を発表することと関係していた。この発表は実質的な軍拡強硬路線の決定を意味したからである。

銃後の「人口戦」の実を上げるために、1938年12月にヒトラーが提案した「ドイツ母親名誉十字章」の顕彰が決定され、翌39年の母の日にナチ政権において初めて300万人の

母親に名誉十字章が授与された。第二次世界大戦開戦の直前のことである。「ドイツ母親名誉十字章」は、本来、戦功のあった兵士に授与する鉄十字章に倣って、戦場で闘っていない者にもそれと同等の功労があった場合に与えるために考え出されたさまざまな勲章の一つであったが、これによって、子どもをたくさん産むこと(その際、民族の血を守り⁽⁶⁾、健全であることが要求されたことは勿論である)、すなわちその数字が「戦功」とみなされ、

女性もまた民族共同体の戦いに制度的に組み入れられることになった。

子どもを4人または5人産むと銅、6人または7人で銀、8人以上で金の十字章が授与された。1944年の最後の受賞者は10万8500人、総計で5,079,296人の母親が顕彰された。⁽⁷⁾

2. 民族・民族上のドイツ人と農婦の母

(1)地母神=農婦の母=民族の母

「地母神」を体現した農婦の母は、子だくさんの推奨にとどまらず、ドイツ民族の「生存圏」の確保と大ドイツ建設という脈絡の中では、民族の血、民族の絆をも表象した。

そこでは、産む性として民族の血を代表する母、民族の伝統を継承する役割を担う母(民族衣装を着て登場するのは専ら女性である)、そして守られる存在としての母が表象される。第5年度24号(1937年5月)の記事「ドイツとは何か」では、ドイツとは「自分たちの身体が生まれ出た土」、「子ども時代の優しく無垢な場所」、「神々しい母の顔」、ドイツとは「生と死」であると規定されている。ドイツそのものが「母なる大地」なのである。父の国を意味する Vaterland 祖国という言葉が、国防が問題となる時に引き合いに出されるのに対し、国を母とみなす、母の国 Mutterland 母国という言葉は、外国に出たドイツ人から見た本国との感情的絆を強調する表現である。

さらに詳しく見ると、生存圏獲得を正当化するために、農婦の老母が利用されることに気づくだろう。外地にあって民族の血を守り、民族共同体の美德とされる犠牲と苦労を誰よりも払ってきた農婦の老母を外国における差別から救おうとする時、農民と切り離せない「土」すなわち「耕地」は、突然「領土」のイメージと重なる。

(2)生存圏と母親表象

1935年1月13日に住民投票の結果、ザール地方がドイツに帰属したことを振り出しに、1936年3月7日の非武装地域のラインラントへの進駐は、ドイツの国民投票の圧倒的支持を得る。1938年3月にはオーストリアがドイツに併合されるが、これも国民投票でドイツ、オーストリア両地域で99%の支持を得る。さらにチェコスロヴァキアのドイツ国境のズデーテン地方には、人口の28%にあたる約300万人のドイツ系住民が住んでいたことから、ドイツは1938年10月1日にズデーテン地方を割譲させている。(その後ドイツは、1939年3月14/15日にチェコスロヴァキアに進軍して、スロヴァキアを従属国にし、16日にチェコをベームン・メーレン保護領として支配下に置いた。)

目まぐるしく変わる国情を読者に周知させるために『ナチ女性展望』は、その都度、該当する地域の農婦や母子の写真を掲載して対応した。図7はオーストリア併合後に、図8はズデーテン割譲後にそれぞれ掲載された写真である。図8には「このズデーテン・ドイツ人

の母の顔には、国境の住人の窮乏と苦悩が刻まれている」とキャプションが付いている。老母の場合は、敬愛すべき老母を窮状から助け出さなければならないという使命感が強調される一方、純粋な喜びの表現は若い女性に任されている。(図9)



図7「チロル地方の若い母」
第6年度23号(1938年5月)



図8「このズデーテン・ドイツ人の母の顔には、国境の住人の窮乏と苦悩が刻まれている」
第7年度13号(1938年12月)



図9「解放と帰郷の幸せを、ズデーテン・ドイツ女性たちの顔が物語っている」
第7年度13号(1938年12月)

メーメル地方の帰属とダンチヒおよびポーランド回廊をめぐる対立により、東プロイセンが注目され緊張が高まると、ポーランド侵攻の二ヶ月前にあたる第8年度1号(1939年7月)では、危機に晒されている苦悩の人々として東プロイセンの老母がクローズアップされる。(図10) この中の1枚の写真に付けられたキャプションを読んでみよう。

女性の顔は、生まれながらにして存在の深い流れと結びついているように見える。厳しい運命に晒された国と生活を感情のレベルで目に見えるように物語るものは、女性の顔以外にない。美しい未来と結びつく若者の血より、老女の顔に民族性は表現される。窮乏と幸福、闘いと苦しみの中で、果敢な生活から聖なる刻印を受けた農婦の顔。

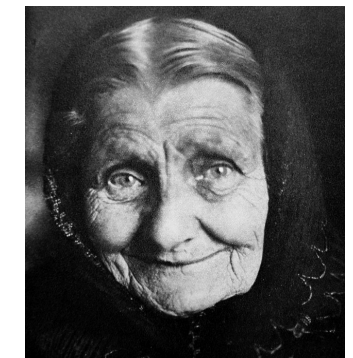
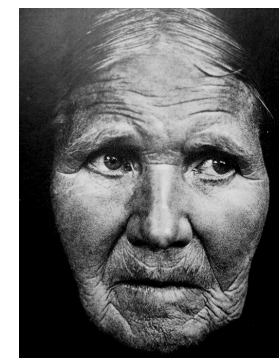


図10「東プロイセンの女性たち」 第8年度1号(1939年7月)

ズデーテン地方割譲後の写真と同様に、ここでも民族共同体のために犠牲を払っている母たちを放置していいのかという感情的決断を煽る方法が見える。

ソ連とのポーランド分割後は、外国にいる民族上のドイツ人の回収(図11)⁽⁸⁾が伝えられていく。バルト諸国から、ヴォリニア(ウクライナ北西部の地方)から、ジーベンビュルゲン(ルーマニア中央部の地方)から、ベッサラビア(ソ連邦、ドニエストル川西方の地方)から、バナト(ハンガリー南部)、ガリチア(ポーランド南西部からウクライナ北部にわたる地方)からドイツ領内に戻った母子たちが紹介される。(図12)第9年度

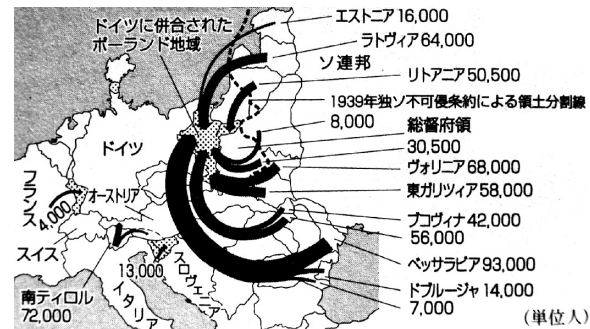


図11 民族上のドイツ人(在外ドイツ系住民)の回収 1939年~42年

14号(1941年1月)のデッサン「ベッサラビアのドイツ人母子」は記事「民族上のドイツ人少女をベッサラビアから受け入れる主婦に対する覚書」への挿絵である。農場や家庭で子どもの世話など労働奉仕義務年を果たすことになるベッサラビア、ブーヘンラント(ルーマニア北部地方)、ドブルージャ(黒海とドナウ川下流に挟まれた地域)の少女受け入れに当たっての注意が記事の内容で、総統の命令に応じ、すべての財産を捨ててドイツに戻った彼らを使用人としてではなく、同志として、初めてのドイツでの生活を支援するよう訴



図12 上段左からバルト諸国、ヴォリニアの母子、ジーベンビュルゲンの農婦

下段左からベッサラビア、バナト、ガリチアの母子

えている。

こうした一連の記事は、大ドイツ帝国建設に向けて刻々と変化する政治情報を伝え、同じ民族の血の絆の下で、母親として民族共同体に貢献する、帰郷した民族上のドイツ人との連帯意識を強化する狙いがあった。そして、生存圏の成立は、ナチ女性団・ドイツ女性事業団にとって新たな活動領域の拡大を意味することになった。

3. 息子を戦場に送り出す母、心配する母、嘆きの母

—聖母マリアの運命を背負う農婦の母・労働者の母—

戦時となると、聖母マリアが含意していた「悲しみの母」はもはや理念ではなく、現実となる。しかし、その運命を担うのは、マリア自身ではなく、農婦や労働者階級の母たちである。例外なく子だくさんの農家や労働者の家庭は、大勢の息子を戦場に送り出したので、悲報を受ける確率も『ナチ女性展望』の読者層であった中産階級の母親より当然のことながら高かった。戦争の長期化・悪化の中で過酷な運命に立ち向かう農婦や労働者の母親を模範として示し、中産階級の女性たちにあるべき母の覚悟を迫ったと考えられる。

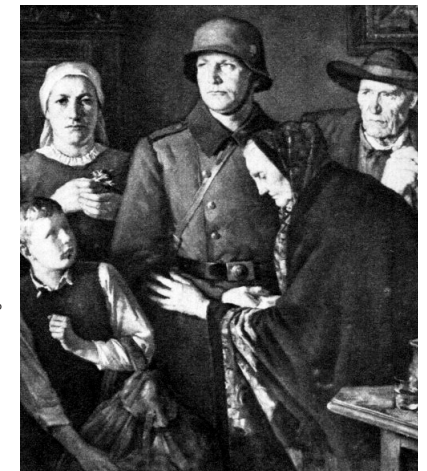


図13 H.シャッヒンガー「息子に別れを告げる母」第10年度18号(1942年5月)

図13は戦場に向かう息子を送り出す場面だが、「聖母に別れを告げるキリスト」の構図を使っている。出征する息子には妻子がいる。彼の父親も居合わせているにもかかわらず、構図の中心は母と息子であり、テーマは息子を気遣いながら送り出す農婦の老母である。



図14 第8年度22号(1940年5月)

図14はエント夫妻と息子たちの記念写真だが、キャプションには「労働者夫妻エントさんの9人の息子たちは現在みな戦場にいる。ドイツで唯一のケースである。夫人は総統からドイツ母親名誉十字章を授与された」とある。読者である中産階級の女性たちは、この写真をどんな思いで見たのだろうか。この写真が添えられた記事「戦時の母たち」は、「息子を戦場に送ったのは皇帝ではなく母だ」と

いう表現を引きながら、たしかに息子を勇敢に育てたのは母であり、総統や国家のために息子が命を賭ければ誇りに思うのは母であること、国家や民族のために働かず、息子がずっとそばに居てくれたらいいと考える母など居りはせず、息子がつつがなく戦時休暇で帰宅しても、国家のために尽くすよう息子を再び戦場に送り出すのが戦時の母だと強調している。無駄になる犠牲などなく、民族の愛の中で永遠になると、母の栄光を描き出している。

図15は「ピエタ」と題する彫刻だが、この身体を露わにした母は聖母マリアではない。地母神の系譜の「母なるドイツ」である。母に代わって国家を体現する彼女が、国家のために戦死した兵士を抱いて、その死を嘆き悲しんでいる。

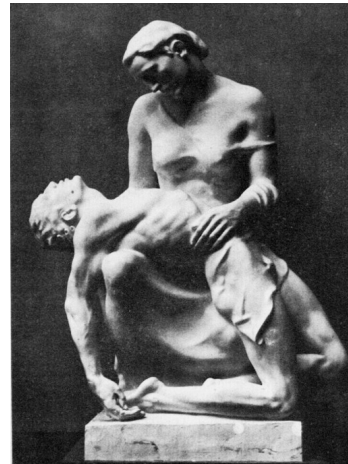


図15 J.トラーク「ピエタ」
第11年度3号（1942年8月）

続々と届く悲報に母たちが取り乱して、銃後の連帯が崩れないよう配慮する一方で、国家存亡の段階に至っては、若い女性たちに対して、人口戦というよりも、民族の存続を訴える写真とキャプションが繰り返される。

女性たちが国家に沢山の子どもを贈ることにより、生命への不動の勇気と生きることへの意志をもって、絶滅を意図する敵に打ち勝たなければ、私たちの父や息子たちの闘いは、無に帰するだろう。(第11年度6号（1942年10月）)

破壊尽くそうとする誤った意志よりも強い力がある。それは、墓と揺りかごを同じく手厚く守る母たちである。戦場から忍び寄る死の影に、揺りかごから射す光をかざして対抗するのは彼女たちである。(第11年度13号（1943年3月）)

しかし、戦争末期になると、「自分の子どもを一度として見ることを許されずに、戦死した父の生きる遺産として小さなリーケちゃんは母にとって慰めであり、生きる意味である」(第11年度15号（1943年5月）)といった、出産推奨より、母として生きることそのものを励ます記事が掲載された。

1930年当時の一組の夫婦の子ども数2.2人が、1940年には1.8人に減少している⁽⁹⁾事実と、労働者階級や農民の家庭は子ども数で減ったことから、ナチ政権が経済的援助や名誉の授与をもって取り組んだ人口政策は、こうしたプロパガンダにもかかわらず、中産階級の女性には有効ではなかったと言えよう。

4. ナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動

(1)ナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動とスローガンとしての「民族の母」

『ナチ女性展望』は、創刊から廃刊までナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動報告の場であり続け、定期的に活動報告が掲載された。ドイツ女性事業団の活動は、合理的な家政の切り盛りや家庭教育についての啓蒙活動、社会福祉活動、家族支援事業などさまざまな慈善活動で構成されていた。1933/34年の冬から経済的に困窮する家庭が冬を越せるよう冬期救援活動を展開し、子どもさんの貧窮家族に支援品を送り、疲れ切っている母親たちを一定期間日常生活から解放する母親保養プログラムを企画・実行し、母親としての専門知識を得るための母親講習会を開催していく。

第4年度23号（1936年5月）の報告記事「救援事業『母と子』の2年」は、ナチ指導部の女性蔑視に対する思いや、今後の事業計画について語っている。

第三帝国の最初の数年間における女性抑圧スローガンには驚かされた。しかし、先のニュルンベルク党大会において総統が、彼の国家では女性と母親が第一の地位であること、女性の協働については、社会的領域における女性の協力を放棄することはできない、と明言されたので安心した。(…)

今後の事業については、次のように計画を述べている。

家族の健康を保ち、生きる意志を持てるよう、就職斡旋や住居環境の改善など経済的困窮を除去する。民族の存続上、苦難のしわ寄せが最もある母子を救済する。10万人の指導者を養成する。農村大管区での健康に関する啓蒙を徹底させる（乳幼児死亡率を下げる）。政治的困難に直面している人々への援助。家政の切り盛りができないがゆえに発生する劣悪な家庭環境を改善する。

母親講習参加者についてのデータを見てみよう。1939年までに170万人が約10万の講習のどれかに参加しており、1944年までには500万人に達している。職業としての主婦・母親の訓練・専門化が進められた。2万5千カ所の母親相談所の利用者は1千万人以上に及んだ。⁽¹⁰⁾母親学校については、1937年にすでに200校あり、数千人の女性教員の職を提供していた。さらに800校が計画され、そのうえ若い女性を対象とした花嫁学校の開校も実現していく。⁽¹¹⁾

第5年度3号（1936年7月）における記事「闘いに優れた女性」は、良妻賢母だけでは不十分であると、「民族の母」としての意識を持ってドイツ女性事業団は社会活動を展開すべしと鼓舞している。ここには、子どもを産み、国民社会主義の思想に基づいて育て、家庭を守るという公的な女性イデオロギーから、ドイツの偉大なる母を目標に、家庭とい

う「小さな世界」に限定されず、社会そのものを「家庭」とみなして、その母たる行動を取るべきであるという拡大解釈が生じている。この「民族の母」というスローガンは現実問題として女性たちが家から社会へ出て行く口実となっていた。

(2)中産階級の母たちと農民・労働者階級の母たち

1939年時点で、何らかのナチ組織に所属していた女性数は1200万人と言われている。内訳は、エリート組織であったナチ女性団に200万人、ドイツ女性事業団に400万人。500万人の労働者階級の女性たちはナチ労働戦線の支配下にあった。ただし、形式的にはショルツ=クリンクに所属していた。その他、10万人以上の女性教師がショルツ=クリンクの指揮下にあった。⁽¹²⁾それでは、ナチ女性団・ドイツ女性事業団の活動と農民や労働者階級の母たちとの関係はどうだったのだろうか。

開戦の直前、ショルツ=クリンクは第8年度2号(1939年7月第2号)でのアピール「全国女性指導者は収穫援助事業を呼びかける」の中で、国家の存続、国民の食糧確保のために過重な労働を強いられている農婦を手助けするために、一定期間の収穫援助、農園での軽作業、家事、子守などの手伝いをナチ女性団・ドイツ女性事業団に要請している。(17歳~25歳の独身女性については、1939年から半年間の労働奉仕義務が適用された。農村奉仕は重要な活動の柱であった。義務期間は、41年から1年間に延長、44年から無期限となった。)

続く8号(1939年10月第2号)の記事「共同体のために動員される母たち——子どもたちのために動員される共同体」では、労働者の母との連携を呼びかけている。出征した夫に代わり、経済国防のために就労している妻に対する援助で、ドイツ女性事業団はすでに託児所等の支援を行ってきたものの、まだまだ不十分で、とりわけ百万都市郊外の託児所の運営に手を貸して欲しいという内容である。(図16)



図16 左が労働者階級の母、右が子守をする中産階級の母
第8年度8号(1939年10月)

つまり、どちらの場合も、あくまで「手伝い」であって、農村においても工場においても労働力不足という大問題があったにもかかわらず、中産階級の母たちに農業や工場労働の仕事に就くよう説得しようとするものではなかった。したがって、家庭と労働の二重負担を負う働く母親の表象は決まって農婦か労働者の母親であった。(図17)

このように、民族共同体への奉仕のあり方に厳然と階級差が存在したことによる不満は、1943年1月30日、ナチ

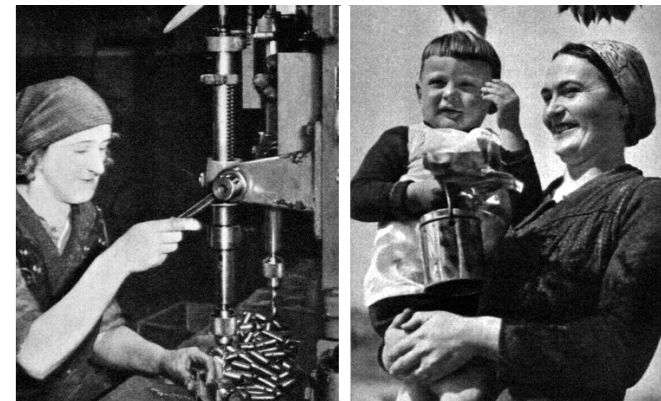


図17 工場働く母親 第10年度18号(1942年5月)

生活と民意を把握するために作成されたナチ党親衛隊保安部の「秘密報告書」は、1943年11月に党官房に宛てて、女性動員の不公平から国民が国家と党に対して懐疑的になっており、このままでは信頼を失うだろうと警告している。⁽¹³⁾民族共同体は統合と国民からの信頼の危機に直面した。

(3)「新しい母親」像

ナチ組織の構成原理はすぐれて階層的であったので、末端からトップまで多数の部局が積み重なり、そのため沢山の役職が存在した。ナチ女性団も1935年3月に正式な党組織に格上げされてからは、この組織構成に倣った。大管区を頂点に、その下に管区、支部、細胞、班と組織網が広がっており、1939年にはナチ女性団・ドイツ女性事業団に所属する女性たちのうち100万人以上が、なんらかの役職に就いていた。⁽¹⁴⁾その女性組織の頂点に立っていたのが、ゲルトルー・ショルツ=クリンクであった。(図18) ナチ体制では、女性は政治決定の場から締め出されていたので、女性組織は党への直接的影響力を持つことはできなかった。しかしドイツ女性事業団の仕事においては、公的役職に就き、民族共同体に対する責任において国家権力を執行する自由が与えられていたのである。



図18 全国女性指導者
G.ショルツ=クリンク

1934年にショルツ=クリンクが全国女性指導者に就任した時の課題は、非ナチ女性から成るドイツ女性事業団をどう取り込むかであった。彼女は、国家から補助金を受けて、余暇活動、公的行事、家政を始めとする各種講習会やスポーツを通じて中産階級の女性たちの取り込み成功する。そして、教育者やソーシャルワーカー、官吏となる機会を与え、「民

族の母」にならんとする女性たちの積極性や野心に報いていった。こうして、家庭から出て、社会進出する「新しい母親」像が誕生する。ヴァイマル共和国時代に利己的と揶揄された「新しい女性」との違いは、以下のシヨルツ=クリンクの言葉に表れている。⁽¹⁵⁾

民族とはいったい何でしょうか。—民族とは自分自身なのです！—それに気づけば女性性は私たち国民社会主義の要請を理解するでしょう。すなわち小さく固有な「私」が、この偉大なる「あなた」という民族に従属しなければならないことを。

「生存圏」という表現は、ヒトラーが使う以前に、1920年代に女性たちが「女性本来の場」⁽¹⁶⁾という理想的な女性領域を考えて使用したものであった。男性の保護下にはあるものの、聖職者や政治家の影響が及ばぬ女性独自の領域として想定された。ナチ政権においては、中産階級の女性たちは、自分の領域が侵されることなく、国家のプログラムが自分たちの価値観に合う場合に積極的に国家に奉仕したのであった。

ナチ女性たちは決して、女性イデオロギーが指示する家庭に閉じこもってはいようとは思わなかった。それは、先述したように、第4年度23号（1936年5月）の記事「救援事業『母と子』の2年」で、これまで歩んできた道を振り返りながら、ナチ党の女性蔑視に対する驚愕を伝える意見に明確に表現されている。また、ナチ政権成立後の失望から「新国家が女性を必要としないと分かっていたら、ヒトラーのために運動することなど絶対になかったでしょう」⁽¹⁷⁾と語る女性指導者もいた。

一方、1934年の大管区女性指導者34人のうち、未婚者は4人いた。また1934年から1939年までに、ドイツ女性事業団の指導者研修に選ばれて参加した者は950人いたが、その時点で既婚者は半数、子どももいないか、平均して1人か2人だったという。⁽¹⁸⁾これも、先に挙げた一組の夫婦の子ども数から考えれば信憑性は高い。1936年頃からは若い世代が多数を占めるようになり、ドイツ女性事業団の指導者は直接ドイツ女子青年団から選ばれ、未婚であった。

ナチ女性団・ドイツ女性事業団は、公的信条通りの産む性としての母親像を宣伝する一方で、「民族の母」という批判不可能なスローガンの下に社会進出し、実活動において男性の影響をほとんど受けることなく、自由に考え独自に行動したと言えよう。その際、農婦や労働者の母たちと自分たちとの区別を厳守していたのである。

おわりに

まとめに代えて、ナチ女性団・ドイツ女性事業団の自己理解を象徴的に表す1枚の表紙を見てみよう。

母親表象において典型的な構図は、子どもを抱く母親である。聖母マリアの含意から、普通抱くのは息子である。それに対して、これは（図19）、多数存在する母子の構図のネガとして注意を引く。すなわち、父親が娘を抱いているという珍しい表紙だからだ。父親は、空軍元帥ゲーリングである。しかし、ここに表象されているのは父親ではなく、制服と勲章が象徴する軍事力、国家権力である。その国家権力が、小さな姿の「母」をいとおしそうに守っている。娘は興味深げに父親の勲章に気を取られている。娘の名前はエッダ。ゲルマン民族の神話「古エッダ」を連想させる。ドイツ民族の血を脈々と伝えてきたのは母たちだった。

中産階級の女性と母たちは、ゲルトルート・シヨルツ=クリンクを頂点に、1920年代に理想とされた女性の「生存圏」という独自の行動領域を作り上げた。そこから生まれる「新しい母親」像は、ナチ指導部が規定したような、家庭に収まり、子どもを産み育てるだけの母親像からはかけ離れたものではあったが、それもまた、「女性の解放」ではなく、男性が支配する政治・経済の世界を始めから諦めた、階級的にも限定された女性の「生存圏」の中だけの自由であったことをこの写真は証している。

（本論は、平成17年度～19年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（B）研究課題番号17310154「表象に見る第2次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」（研究代表者 加納実紀代）の研究の一部である。）

註

*本稿は、2007年6月17日（日）朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンターで開催された日本西洋史学会第57回大会、小シンポジウム「第二次世界大戦下、表象に見るヨーロッパと日本—ジェンダー・民族の視点から—」で報告した「女性雑誌『ナチ女性展望』がつくり出す母親像」を基に書き直したものである。

(1) 雑誌の号数の付け方が特殊なので、簡単に説明しておこう。創刊号が発刊された1932年7月から翌年6月までの一年間を「初年度」という呼び方をしている。したがって、廃刊になった1944/45年号は「第13年度」ということになる。発行頻度は「14日に1冊」で始まり、戦争の長期化とともに発行頻度は減少した。初期は年度、号数、西暦、月日が明記されたが、そのうち月日は省略され、第7年度からは「7月第1号」のように、年度の通し号数のほか、



図19 「娘エッダを抱く空軍元帥ヘルマン・ゲーリング」第8年度16号（1940年9月第2号）

その月の何号に当たるかも記載されている。とはいえ通常は月2冊、まれに3冊発行されるだけである。「3週間に1冊」になる頃から「月1冊」へかけては、月ごとの号数表示は消える。このように、発行号数表示はたびたび変わっている。なお、『ナチ女性展望』解題については、拙論『『ナチ女性展望』NS *Frauen Warte* とその表紙にみるジェンダー』敬和学園大学研究紀要第17号、2008年、199～216頁参照。

- (2) ナチ指導部は1931年、それまで独自の活動を展開していたさまざまなナチ女性組織を一本化して「ナチ女性団」を結成させた。
一方「ドイツ女性事業団」は、1934年に強制的同質化によって非ナチ女性組織が統合されて誕生した。これにより、1894年に設立され、ヘレーネ・ランゲや1910年に会長に就任したゲルトルート・ボイマーに率いられて教育、職業、政治などの分野で女性の権利獲得のために闘ってきたドイツ初の女性団体「ドイツ女性団体連合」は、ナチ化か解散かを迫られ、後者を選択し、その歴史を閉じた。1931年時点で連合に加盟していた団体は96、加盟人数80万人。
- (3) ノルベルト・フライノヨハネス・シュミッツ（五十嵐智友訳）『ヒトラー独裁下のジャーナリストたち』朝日新聞社（朝日選書560）、1996年、108頁および110頁参照。
- (4) 『『ナチ女性展望』NS *Frauen Warte* とその表紙にみるジェンダー』敬和学園大学研究紀要第17号、2008年、199～216頁。
- (5) *NS Frauen Warte*. 2. Septemberheft 1934 (3. Jahrgang 7. Heft), S.210/211.
- (6) 第9年度7号（1940年10月）には、ドイツ人の血を守る母と4人の子どもの写真と、「自分の国のためにアフリカ人との混血児を産む多くのフランス人の母親」というキャプションを配した、混血児を抱く二人のフランス人女性の写真が並べられている。そこにヒトラーの言葉が添えられている。「私たち人間は、なぜ神の摂理が人種を創り出したのか議論する必要はない。そうではなく、創造を誤用する者を罰することを認識すればよいのだ。」
- (7) 第12年度9号（1944年5月）の記事「母たちよ、あなたたちが祖国を支えている」に添えられた写真のキャプションより。
- (8) 山本秀行『ナチズムの時代』世界史リブレット49、山川出版社、2006年、75頁より。
- (9) ウーテ・フレーフェルト（若尾祐司ほか訳）『ドイツ女性の社会史 200年の歩み』晃洋書房、1990年、214頁。
- (10) 前掲書、216頁。
- (11) 第5年度23号（1937年5月）の記事「1937年の母の日のドイツの母たちへ」参照。
- (12) クローディア・クーンズ『父の国の母たち』（上）時事通信社、1990年、286頁。
- (13) 矢野久『ナチス・ドイツの外国人強制労働の社会史』現代書館、2004年、51～53頁参照。
- (14) ウーテ・フレーフェルト、224頁。
- (15) 第3年度7号（1934年9月第2号）の記事「1934年9月8日、ニュルンベルクにおける女性会議でのドイツ女性指導者ゲルトルート・シヨルツ＝クリンク氏の演説」、207頁。
- (16) クーンズ、58頁参照。
- (17) 前掲書、227頁参照。
- (18) 前掲書、286～287頁参照。

Ladies' Home Journal 誌に見る 既婚女性の戦争協力

松崎 洋子

アメリカでは19世紀以降、工業化社会への移行に伴う市場経済の発展の中で家庭が生産活動の場として機能しなくなり、特に都市部に暮らす白人中産階級においては男性が外で働き、女性は家事・育児に専念するという役割分担が確立されていった。これに呼応するかのよう、敬虔で従順、純潔、家族への犠牲的精神などヴィクトリア朝時代の女性の美德とされる概念がアメリカにおいても強調されるようになった。そして、男性が仕事をし、金銭的な価値に支配される「外の世界」に対して、「内の世界」、すなわち「家庭」は男性が外の世界からもどって、肉体的精神的に癒される場所として機能することが求められた。女性の役割は「家庭」にいて、夫につくし、子育てをし、家族の調和をはかり、「避難所」の使命を果たすことにあったといえる。このような考え方がアメリカン・ホームの「伝統」として受け継がれてきた。

第二次世界大戦が勃発し、参戦後は1600万の兵士を戦場に送り出し、総力戦を余儀なくされたアメリカにとって女性の労働力動員は戦争遂行に必要な「国策」であったが、それは同時に男女の役割分担というアメリカの「伝統」とどう折り合っていくのか、という問題でもあった。国としては、戦争という非常事態の中で差し迫った労働力不足に対し、「伝統」は「伝統」としてその価値を認めながらも女性の勤労働員を成功させなければならなかった。

「伝統」を打ち崩さずにできるもっとも簡単な動員方法はまさに戦争の「非常事態」的側面である。一時的な非常事態であるから女性が「一時的」に家庭の外に出て戦時労働に従事することに問題はない。戦争が終われば本来の居場所である家庭にもどればよいのである。さらに効果的なのは、前線にいる兵士を助けるため、アメリカの勝利に寄与するべく女性が外に出て働くのは称賛に値する「愛国的」行為である、と訴えることであった。

一方、女性の居場所は家庭であるという従来の価値観については、「非常事態」であっても14歳以下の子供がいる場合は働くべきではない、と歯止めをかけて子育ての場である家庭の大切さも強調している。ただし、戦線が拡大し、労働力不足が加速すると、保育施設の拡充をはかったり（前述のような事情でアメリカでは「子育ては家庭で」という考え方が行きわたっていたので、公共の保育施設はまったく発達していなかった）、買い物を引き